第39回兵庫県医療審議会保健医療計画部会　議事概要

●日　　時：令和４年３月11日14：00～16：00
●場　　所：兵庫県医師会館６階会議室
●出席委員：足立　光平　（兵庫県医師会副会長）
臼井　里佳　（兵庫県愛育連合会会長）
大村　武久　（兵庫県病院協会会長）
笠井　秀一　（兵庫県薬剤師会会長）
榊　　由美子（兵庫県栄養士会会長）
澤田　隆　　（兵庫県歯科医師会会長）
島　　正之　（兵庫医科大学教授）
竹内　徹　　（全国健康保険協会兵庫支部支部長）
太城　力良　（兵庫医科大学理事長）
成田　康子　（兵庫県看護協会会長）
西　　昂　　（兵庫県民間病院協会会長）
登里　倭江　（兵庫県いずみ会会長）
浜上　勇人　（兵庫県町村会理事・香美町長）
深井　光浩　（兵庫県精神科病院協会会長）

●欠席委員：飯島　一誠　（兵庫県立こども病院院長）
中村　文代　（兵庫県消費者団体連絡協議会会長）
眞庭　謙昌　（神戸大学医学部附属病院院長）

●次　　第

1　開会

2　健康局長挨拶

3　議事と結果

（１）議決事項

① 川西リハビリテーション病院の開設について

資料により事務局から病院開設の経緯、開設の際に適用する特例について説明。全会一致で承認を得た。

② 特例診療所の病床設置について

資料により事務局から事業概要、申請状況等について説明。

全会一致で承認を得た。

③令和３年度　病床機能転換推進事業、医療機関再編統合等支援事業及び病床機能再編支援事業について

資料により事務局から事業概要、申請状況等について説明。

全会一致で承認を得た。

（２）報告事項

① 地域医療構想の推進について

資料により地域医療構想実現に向けた国の動向、各圏域での取組状況及び令和２年度病床機能報告（稼働病床）結果について報告した。

４　議決事項についての主なやりとり

○議決事項（1）－①

委　員：いわゆる地域のニーズもあると思うが、今回の形の中で、急性期を含む川西市立総合医療センターと、川西リハビリテーション病院で担っていくという形になろうかと思うが、それについては跡地医療も含めて、地域のニーズにあったものになっていると考えてよろしいか。

事務局：川西市立総合医療センターについては高度急性期、こちらの新病院は回復期ということで、役割分担を行っており、地域のニーズは満たしていると考えている。

結　論：事務局案で承認。

○議決事項（１）－②

委　員：はえの診療所について、今は診療所での最低限の外来機能等を有するものということになっていたと思うが、それについても機能的・設備的に可能であるのか。あるいは２ベッド追加することで新たに増設されるのか。その辺の設備関係についてはどうなのか。

事務局：設備的には、この２床の新設ということなので、病床設置の目的のなかにも書かれているが、訪問診療や外来などをやっていく中で、一時的入院やレスパイト、看取りといったことで、どうしても一定入院機能も必要だと。数はそれほど多くはないものの、そういったニーズがおそらく現場の中で高く、おそらく構造上等の問題で、２床ということになったと聞いているが、現場のニーズを踏まえて整備されるものと聞いている。

委　員：尼崎マタニティクリニックについて、尼崎における産科の実態は、具体

的にこの間でだいぶ減ったのか。今どれくらいあるのか。

事務局：ここ２、３年で３か所、計 36 床減った。
そういった中で、逆に基幹病院の方にいわゆるリスクの低い分娩も流れているということで、役割分担が崩れてきていることもあり、19 床の増床という整備が行われると考えている。

結　論：事務局案で承認。

○議決事項（１）－③

委　員：市立川西の跡地にはリハビリテーション病院が設立されるが、協立病院の跡地については特別計画があがっていないとのこと。今のところ、跡地利用に関するニーズや要望は挙がっていないのか。

事務局：もともと協立病院と市立川西病院は近接しているので、回復期については、川西リハビリテーション病院の開設により一定対応するという形と聞いている。

委　員：多可赤十字病院については、急性期を少し減らし、回復期に転換しており、慢性期については、介護医療院に転換したものでまかなっていると聞いたが、これは介護医療院が併設されているのか。

事務局：併設されている。なお、介護医療院については、既存の老健施設があるということで、そちらで対応いただくかたちである。

結　論：事務局案で承認。

○報告事項（２）－①

委　員：地域医療構想を検討する調整会議が北と南に分かれていることは、問題だと思うが、事務局の意見を伺う。

事務局：もともと阪神南北ということで、物理的に協議の場を設けるということもなかなか難しいと聞いていたが、コロナの影響でオンラインの整備が整い、そのような環境に慣れてきたということで、物理的な距離を埋める手段はできたので、コロナが収束して、地域医療をしっかりと考える機会を持っていただきたい。その中で、南北の融合も諮っていただきたいと考えている。